



第10号

1997年2月

オーストリア人が見た日本

安部 彰

平成八年の四月オーストリア（カンガルーのいない国）から岐阜大学へポスドク留学生が訪れた。彼女の名前はコンスタンツェである。その年の三月にインスブルク大学を卒業した三十一才の女学生であり、日本をこの上なく愛する。三カ月間であったが、彼女を通してヨーロッパ文化に再び接する機会があった。異文化から見た日本を紹介する。

インスブルクでの日本文化

小さな街、インスブルクにも十人くらいの日本人が生活していると云う。トヨタやニッサンの立派な車販売店があっても、日本語の新聞は手に入らない、ラジオは聞けない、日本食レストランは軒もない。しかし、この街にも日本語、禅や柔道などの日本文化を教える市民カルチャー講座がある。大学の中にも日本に興味をもつ人に合うことができた。図書館の職員である。突然「こんにちは」と挨拶されて驚いた。彼は禅の勉強をしており、名刺に「泰山和尚」

1997年2月28日
 岐阜医療技術短期大学
 紀要委員会 発行
 関門市平賀字長峰795-1
 電話0575-22-9401
 印刷所 西濃印刷株式会社

目次

オーストリア人が見た日本	安部 彰	1
郷土大垣	金森勇雄	5
バイオビクシー国際シンポジウムと中国印象記	加藤敏郎	6
良書に出会う楽しみ	高橋隆夫	11
覆面算で楽しむ百人一首	上西時司	14
諸国漫遊記		
II Louis Pasteur と		
パスツール研究所	上野一恵	17
新東方見聞録	森内和之	27
Regress or Progress	蟹江 匡	36



パスツールの高弟の1人であるメチニコフ（1845～1916）の記念切手。メチニコフはノーベル賞の受賞学者。1966年発行。

(20頁参照)

と書いてあった。しかし、日本語は二・三の挨拶のみと知り少し残念な気持ちであった。

もう一人は、ローデ博士である。「ななはん」のような大きなカワサキに乗っている。この国はタイ、インドネシア、ベトナム国へ教育支援をしており、幾人かの学生が先生の所で学んでいた。先生とお話する機会を得たが、日本語は大変に流暢であった。

私が昨年の夏に大学を再び訪問した時、コンスタンツェが短期ボストクとして日本に留学したいと私に相談した。問題は生活費であった。日本の生活費の高騰さは知られている。岐阜での生活費を概算すると、外国人留学生寮に入ったとして月一万二千円くらいの部屋代、電気代五千円、食費が七万円、交通費などを含めて月約十万円くらい掛かると話した。

早速、彼女はオーストリア政府に留学基金を申請した。三月末に無事博士号をもらったが、残念ながら留学基金は政府の経済的な理由から外れてしまった。ところが、彼女は自費で留学することを決心したので、私と妻がいろいろ世話をすることになり、彼女の日本での生活が始まった。

オーストリアの教育制度

小学校はフォルクスシューレと呼ばれる四年生の学校である。この先は、大学へ進学する子と、就職する子は、別な学校を選ばなければならぬ。早い時期に将来の進路を選択することは大変に難しいと思う。就職する子はハオプトシューレ（中学校）へ四年間通学してから、二〜三年の実務課程や上級課程を経て職につく。

進学する子はジムナージムと呼ぶ高等学校へ八年間通う。大学進

学まで十二年間の教育を受けることになり、日本と同じである。その後、「マツラー」と呼ぶ高校卒業資格証明試験を受けて大学に入る。ドイツではアビツアと呼ばれるが合格はかなり厳しい。インスブルクで毎年二十〜二十五人くらいの生徒のみが合格するそうだ。合格すればどの大学にも入学できるが、卒業できる学生は半分くらいである。大学の教育は五年間で、医学部は六年間である。卒業生はマグスター（修士）の称号が与えられ、日本の学士はない。

臨床検査技師には二つのコースがある。中学卒業後と、マツラー取得後に入学できる、それぞれ三年間の臨床検査技師学校がある。卒業すれば技師免許が与えられ、前者はMTFと云う技師資格で、彼らの多くは民間の検査所に勤務する。後者はMTAと云う技師資格であり公立病院の技師となる。いずれのコースのカリキュラムも日本と似た内容であり、アカデミックな称号はなく、日本の準・正看護婦学校に似たシステムである。

博士課程への進学はさらに四〜五年の教育を受け、論文の審査を受けてドクトール（博士）の称号を得る。ファーストネームで呼ぶ合うことが多いが、電話帳にはマグスターやドクトールの称号が書かれており名誉ある称号である。

ドクトールの審査には一〇〇頁にも及ぶ論文を自作製して、まず教授に提出して直して頂く。審査に合格すれば親しい友達を招いて、お祝いのパーティを盛大に催す。もちろん、親からも祝福される一大イベントである。その後、いわゆるボストクの留学をすることになる。

インスブルク大学は一六六九年、皇帝レオポルド一世が開設した歴史ある大学である。正式にはレオポルド・フランツェンス・イン

スブルグ大学と呼ばれる。法学、経済学、医学、人間学、自然科学、建築学、カトリック教学などの学部があり、二万六千人の学生が学び三千人の教官がいるそうだ。大学の建物は街に散在している。

ハイテク国の日本

彼女は四月一日月曜日から通学する予定で、三月三十日土曜日に成田に着いた。妻が空港まで迎えに行き、月曜日までの二日間、私の家に泊めた。日本を紹介した一―二冊の本を持っているのみで、日本語を一切理解しない。月曜日の朝、入寮手続きを済ませ、研究室に向かった。大学の中は古くて、狭く、また汚い。開口一番、「日本はハイテクの国と思っていた」と、なにか期待外れの感じを受けていた。

我が国では便利な機能のついた電化製品が多く、家庭に備わっている。白衣の洗濯を一時間で仕上げたら驚いていた。これこそ「ハイテク」だ。ヨーロッパの洗濯機などの家庭電化製品は大型で頑丈である。便利な機能はついてない。だから、壊れにくいし、一度買ったなら修理して長く使うのであろう。需要が少ないから電気製品は一般的に高価である。

国際都市の資格

バスの乗り方を教えるのに大変であった。我々も日常、岐阜市内バスに不便を感じている。バスの行き先、バス停など英語の表示は全くない。せめてコース名は「あいいうえお」でなく、数字にして欲しいと思った。彼女が最初に覚えた町名は「柳が瀬」、英語の道路標識を見て「ヤナガッセ」と云った。ドイツ語で「ガッセ」は街の名

称に使われる「通り」のことであり、共通の地名にびっくりしたのであろう。

外国へ行った人は外国人は親切と云う。また、外国では日本人は親切であると聞く。親切さを簡単に比較できないが、日本人の親切さは物的な親切で、外国人の親切は心の暖かさでないだろうか。すれ違う時、必ず相手の目を見る。目と目が合えば、暖かい言葉や笑顔の挨拶が必ず返ってくる。困っている顔を見れば必ず声がかかる。仲間が次第に増えていく気持ちである。日本人は一般的に挨拶が下手だと思ふ。目と目をあまり合わさない。お互いの身分を判断し、言葉使用を変えて挨拶しなければならぬ。とつさに明るい挨拶の言葉が出てこない。彼女は研究室で、言葉のコミュニケーションができない上に、この様な環境に悩んだようだ。

いねむり

我々はよく屋外で居眠りをする。電車の中、昼休み中の公園のベンチ、駐車した車の中、授業中、研究室など、これらの光景に驚いていた。JRのベンチ式の座席に座って「ほら、ごらん」と、ほとんどの人が眠っている。西欧人にとってこの光景は奇妙だそうだ。これは、アジア人に共通していると云う。彼女も日本に来てから電車で居眠る癖がついていた。アジアの気候や人混みが疲れ易くしているのだからか。若者が老人、子供など弱者に対して車内で席をほとんど譲らないことも驚いていた。ヨーロッパでは妊婦に対して、絶対的に席を譲る習慣だそうだ。

日本人は風呂好きである。夏場でも熱い風呂は気持ち良い。彼女には暑い日に熱い風呂に入ることが理解できないそうだ。ヨーロッパ

パにも温泉はいくつかある。お湯はぬるく、水着を着用して入るそうだ。彼女の友達ワルターが帰国前に一カ月間、日本を訪れた。この機会に下呂温泉へ連れて行った。くつろいで、露天の熱いお湯につかる気分も気に入ったようだ。私が彼と長々と温泉を楽しんだ後、部屋に戻った時、彼女は「男同士の話は長いからね」とあきれいていた。日本では女性の長話は知られているが、ヨーロッパでは男性の方が話し好きの様だ。

休日

ヨーロッパの祭日のほとんどはキリスト教にちなんでいる。年間十二日くらいある。4月のオスターと十二月のクリスマスに、学校は一週間くらい休暇となる。オスターはイエスキリストの復活を記念した祭りで、家庭では装飾した卵を飾ったり、うさぎの形のお菓子を造って祝う。商店は土曜日の午後、日曜、祭日は閉まる。人口の八十五％はカトリック教であり、休日は教会へ礼拝に行く日である。昨今、休日に礼拝に行く人は少なく、困った時の神頼みやセレモニーのみにお祈りをし、日本人の神道や仏教への関心と同じだそうである。

五月のゴールデンウィークや休日を使って京都、奈良、伊勢、広島、宮島、倉敷などを旅行した。これらの場所はすべて彼女の希望すなわち外国人に人気ある場所である。最も感動した場所は広島だそう。原爆については、悲惨な情景を映像などでよく知っていたので、実際に当時の資料を見たいのと、街の復興について興味があった。オーストリアで購入したJRパス（約六万円）で二十一日間新幹

線など自由に乗れる。を使って、帰国前に東京、アイスランド、箱根、伊豆、神戸などを旅行していた。



コンスタンツェ（右）とワルター

おわりに

彼女の日本留学中に、私も日本についていろんな経験をした。昨年、この稿で「ヨーロッパの自然保護精神」について紹介したが、ここでは西欧人から見た日本の印象の一部を紹介した。彼女は本当に日本びいきである。日曜日にショッピングができる便利さ、畳、布団の生活も大変に気に入っていた。そば、寿司などの日本食を存分に味わった。帰国したら、親や友人に日本の食器でそばや寿司の料理をするのだと、食器や食材を送っていた。来るときに化粧品などを入れていた機内持ち込み鞆に、調味料などをぎっしり詰めて七月に帰国した。今、医薬品会社の研究員としての職を探しているが、まだ決まっていない。オーストリアも経済的に極めて厳しい状況である。（あべ あきら 衛生技術学科教授）